

貴族日記と説話

——藤原成佐をめぐる二説話と『台記』——

柳川 響

一 はじめに

保元の乱で横死した藤原頼長は卓越した学才で夙に知られているが、頼長には学問の師が複数存在した。藤原令明、藤原敦光、源師頼、中原師安、藤原通憲など、頼長が師友の交わりを結んだ人物は少なくないが、藤原成佐もその一人であった。成佐は頼長が始めた經書講論に当初から加わり、主要メンバーとして共に学問の研鑽を積む一方で、頼長に近侍し、時には頼長の過ちを正す諫臣でもあった。頼長の日記『台記』⁽¹⁾には漢籍に基づく成佐の言葉が残されており、また、成佐の作った「泰山府君都状」からもその高い学識が窺える。頼長は多くの学者の中でも成佐を最も重用した。告文「請以成佐任式部権少輔之状」では師匠尊重を説き、頼長の推挙によって成佐は上臈十二人を超えて式部権少輔に任ぜられた。成佐が頼長の学問や思想に与えた影響は計り知れず、その交誼は『台記』に具に

記されている。特に病床にある成佐の平癒を祈る場面や、成佐の死後に諫言を思い出す場面は影響力の大きさを端的に示している。

しかしながら、成佐の記事は他の日記・記録類に見出し難く、詩文や説話も殆ど残っていない。詩や文章に関しては、『台記』の保延五年（一一三九）六月四日条に詩句が、康治二年（一一四三）十二月七日条に都状が載せられているに過ぎない⁽²⁾。また、説話については『続古事談』と『古今著聞集』に同趣の話が一話ずつ収録されるだけで、現存する記事は非常に少ない。そのため、成佐に関する話題を多く記す『台記』は、人物を知る上での第一級資料と言える⁽³⁾。

これまで成佐を扱った研究は極めて少ないが、平安時代末期の摂関家周辺の学問や文学、そして頼長という特異な人物を考える上で、成佐を取り上げて検証する意義は小さくない。また、頼長周辺の人物を明らかにすることで、説話文学の範疇において『台記』の受容を考える契機ともなりうる。『続古事談』と『古今著聞集』では、

どちらも菅原登宣の夢に亡くなった成佐が現れ、三途を免れられなかったことを告げる点で共通する。この二つの成佐説話は、『台記』で頼長に敬重された才士の末路として、悲劇性を強く印象付ける。

その一方で、頼長周辺で成立した説話と考えると、『台記』の理解から説話を補強的に読むことも可能となる。両説話集では説話の記述や解釈に差異があるが、二説話を『台記』の記述から詳細に検討することで、より深い説話理解を示すことができるのではなからうか。

本稿は、二つの成佐説話を『台記』の視点から捉え直し、改めて解釈することを通じて、『台記』から頼長周辺の説話を読み解く意義を提示することを目的とする。そして、『台記』など頼長周辺を淵源とする説話群を想定し、「頼長淵源説話」について今後検討していくための手掛かりとしたい。

以下では、まず、『続古事談』と『古今著聞集』の成佐説話について、その本文と内容を確認する。次に、成佐の人物像について『台記』を中心に整理し、頼長との人間関係や学問上の交流を明らかにしたい。そして、『台記』の記述を踏まえながら二つの成佐説話を考察することで改めて解釈を行い、頼長を中心とした説話世界を考える一助としたい。

二 二つの成佐説話

『続古事談』は編者未詳、跋文によると建保七年（一二一九）成立、『古今著聞集』は橘成季の撰、跋文によると建長六年（一二五四）成立の説話集である。

〔続古事談、巻二（一九一）〕

式部少輔成佐と云博士、在生之時、「事善は無益の事也。後世の為に理観をこらすべきなり」と常にいひけり。死て後、菅登宣といひし者の夢に、かたちいみじくおとろへて、くずのはかまに、あをばみたる衣をきてありければ、「後世はいかに」と問ければ、「三途をまぬかれず」といひければ、「平生のときたてられし義はいかに」と問ければ、「焰王の疑問をえて、其義を述るにあたはず」となんいひける。生をへだてつれば、才学のものも思ほどの事いひひらきがたきにこそ。あはれなる事也。

〔古今著聞集、巻十三（四五九）〕

仁平元年九月七日夜、菅登宣が夢に、故式部権少輔成佐、法師がかたちにて、やせいまくしげにて、あをき衣に袴をきて、三途をのがれざるよしを語。登宣、「平生にたつる処の儀いかに」と尋ければ、「炎魔王の疑難をえては、其儀をのぶる事あたはず」といひけり。成佐漢才に長じて、よく仁義礼智信をしりたりけれども、後生の事をさとらずして、かゝるくるしみを

えけるにや。かなしむべき事也。同十一月廿九日、宇治のおとゞ、成佐が弟子どもに支配して、一日に三尺地藏菩薩の像を図絵し、法花経一部を書写して、成佐が妻がもとにて供養せられける。

おとゞは、成佐が弟子にておはしましけり。久寿元年の春の比、おとゞの勾当有忠が夢に、成佐鬼道にありといへども、人を害する心なしとみたりけり。いかなりける事にか。

両話とも、成佐の死後、菅原登宣の夢に憔悴した姿で現れる。成佐は閻魔王（焰王、炎魔王）の疑問に対して生前に立てた義を述べることができず、三途すなわち三悪道を免れられなかったという。

両者を概観して比較すると、『続古事談』は「事善は役に立たないことである。来世のために理観に集中するべきである」という成佐の生前の言葉を載せている。才学に優れた人物も冥途では上手く弁明できなかったというのが説話の趣旨である。一方、『古今著聞集』

には生前の言葉はないが、年月日を明記し、成佐が漢才に長じ、五常を弁えていたこと、後世を悟らなかつたことを記している。つまり、三悪道に堕ちた理由として仏道を疎かにしたことを挙げており、『続古事談』の論理とは異なる。また、頼長（宇治のおとゞ）が成佐の弟子であることにも触れ、その供養と成佐のその後について記す。すなわち、頼長が成佐の弟子たちに指示して供養を行ったところ、頼長の勾当源有忠の夢に、成佐は餓鬼道にいたが、人に害を加える様子はなかったという。本話の趣旨は直ちに決し難いが、少なくとも、漢才に優れ、五常を弁えた成佐が仏道を軽んじて三悪道に

堕ちたこと、頼長の供養と成佐の夢告を語ることが、『古今著聞集』の主たる内容となっている。

両話の出典は未詳である。但し、両説話集の『台記』受容については留意する必要がある。『続古事談』は六話（七、五二、六九、七七、一三七、一五九）、『古今著聞集』は少なくとも十三話（九五、九六、一二四、一二六、二七四、二八〇、二八二、二八四、四二二、五九七、六八八）が『台記』の記事と共通し、これらの説話はいずれも『台記』以外に先行する同類話が見出せないため、『台記』を典拠とした可能性が高い⁴。両説話集の編者が共に『台記』を直接参看したことは、成佐説話を考える上でも重要である。

具体的な内容について考察する前に、まずは説話配列の観点から両説話集の解釈を確認し、一度『台記』とは切り離れた形で説話の趣旨を考えてみたい。

『続古事談』では「臣節」に入る。前話までは和歌に関わる話題が続き、本話以降は後世や往生の話が続く。特に後話は夭折した藤原通輔が息子公明の夢で詩を作り、初めは下地で五濁の浪を受けたが、漸く天上に生まれたことを伝える。これは父母が千日講を行って通輔の後世を弔ったからであるという。死者の後世が夢中に示される点では共通するが、夢告の内容は成佐が三悪道を免れられなかったことと好対照を成す。

本話では頼長との関係など成佐個人について多くを記さず、どちらかというと成佐を一人の学者として、より抽象化して捉えている。

「事善は無益の事也。後世の為に理観をこらすべきなり」という自らの仏教観を常に口にしていた学者が、冥途では才学を發揮できず、三悪道に墮ちる。博士と称されるほどの大学者の学問が死後は役に立たなかったことが本話の趣意であり、この説話の面白いところである。すなわち、成佐が優れた学者である点に眼目があり、逆説的には成佐の学問的資質を保証する説話とも言える。

一方、『古今著聞集』では「哀傷」に入り、本話の主眼が人の死に対する悲しみであることが分かる。前話は藤原重隆が冥官となり、白河院が死後生まれ変わる所が決まっていなかったことを或人の夢で語り、鳥羽院が追善を行ったという内容である。後話は高野山を出た西行が鳥羽院の葬送に巡り合わせて和歌を詠む話である。どちらも死者への哀傷に関わる点で共通するが、特に前話は死者への追善という主題で繋がる。しかし、鳥羽院が追善を行ったという記述で終わる前話に対し、本話は追善の結果が記される点で異なる。三悪道（地獄・餓鬼・畜生）を逃れられなかったという夢告を受けて、頼長は追善供養を行うが、成佐は三悪道の一つ、餓鬼道に墮ちた。確かに、「人を害する心なし」と見えた点において、頼長の供養がある程度成佐の苦患を和らげた可能性も考えられる。しかし、結果として餓鬼道に墮ちたことは、供養がそれほど顕著な靈験を發揮しなかったことを示している。

本話では法師姿の成佐が登場し、生前に来世に向けた徳行を積みなかったために三途の苦しみを得たと解している。また、餓鬼道に

墮ちたこと、その後供養を行ったことを記し、全体的に仏教的色彩が強い。話末に「いかなりける事にか」とあるように、頼長の供養と成佐のその後に重点が置かれている。

このように二つの成佐説話は記述内容や解釈に少なからず差異が見受けられる。『続古事談注解』は、『古今著聞集』では頼長周辺の話であることが明瞭であるのに対し、『続古事談』では頼長に全く言及していないことを指摘する。また、成佐が三悪道に墮ちた原因について、『古今著聞集』が漢才と道心との対照に中心を置くのに対し、『続古事談』は「事善は無益の事也。後世の為に理観をこらすべきなり」と言っている成佐の傲慢さを読み取っている⁽⁵⁾。

この二説話を考える手掛かりは頼長にある。なぜなら、成佐、登宣、有忠という人物が頼長周辺の人物であり、彼らを詳しく知るためには『台記』を紐解く必要があるからである。例えば、源有忠は頼長の勾当であり、菅原登宣は成佐と同様に頼長に近習した儒者であった。

有忠は従五位下、美濃守信邦の子で、上西門院判官代でもあった（『尊卑分脈』）。『古今著聞集』に記される久寿元年（一一五四）には、頼長が吉田神社に神馬を奉る際の使いとして「行事勾当源有忠」の名が見える（久寿元年四月十八日条）。成佐が死の直前、病で穀物が食べられなくなった時には、成佐は有忠を使いとして頼長に薯蕷粥を請うている（久安六年（一一五〇）十二月十三日条）。

また、菅原登宣は『尊卑分脈』に従えば文章博士や大学頭であつ

た菅原時登の子であるが、『台記』によると時登の養子で、実父は安楽寺別当信永という（久安四年十一月二十九日条）⁶⁾。登宣の先祖には道真がおり、文章博士が輩出した学問の家であった。登宣自身も頼長の行った学問料試に合格して給料官旨を受けている（『本朝世紀』仁平三年（一一五三）五月二十七日条）。この学問料試については『古今著聞集』巻四（二二六）に採録されている。さらに、『保元物語』の諸本には、保元の乱前夜、頼長が上洛して白河殿に入った時に同車していた人物を登宣とするものもある⁷⁾。

成佐と同様、登宣の記事も他書には多く残っていないが、『台記』にはその言行が少なからず記され、頼長にその才智を高く評価されている。頼長の推挙によって崇徳院に昇殿を許された時には、「理運に非ずと雖も、其の智を愛するに依り挙ぐる所なり」と記す（久安四年十一月二十九日条）。また、『春秋穀梁伝』の講論で講師を務めた時には、「答ふる所分明なり。聴く者歎美す。以て范甯の再生と為す」とあり、『春秋穀梁伝集解』を著したことで有名な東晋の学者范甯に准える。久安二年に『老子』を講じた時には「成佐甚だ拙く、登宣独歩す。後生畏るべし畏るべし」と、講師として拙劣であった成佐に対して、問者登宣の若く卓越した才能を称賛している（久安二年二月二十二日条）。このように登宣は成佐と共に頼長主催の講論の主要メンバーであり、頼長を学問でもって支えた儒者の一人であった。さらに、頼長の使いとして生前に成佐の病気を見舞い、没後に成佐の母を訪ねて喪を弔ったのも登宣であった（久安六年十

一月五日条、仁平元年三月二日条）。

登宣や有忠が死後の成佐を夢に見る所以も、頼長を中心とする緊密な人間関係にあったと考えられる。そして、説話を明らかにする最大の手掛かりは『台記』にあると言える。頼長について全く言及しない『続古事談』の成佐説話においても、頼長周辺で成立した説話と見做しうるので、やはり説話の裏側に頼長の存在を読み取るべきではなからうか。すなわち、成佐や登宣という人物に関わる説話を頼長と切り離して考えられるかが、『続古事談』における問題である。説話の背景に『台記』を想定することでどのような解釈が可能となるか、成佐の人物考証を通じて考察したい。また、『古今著聞集』における最大の問題は頼長の供養と其後の成佐についてである。仏教的文脈の中で頼長の供養がどのような意味を持つか、餓鬼道という結果について『台記』の記述から考えたい。

三 藤原成佐とその才学

二つの成佐説話を『台記』から読み解くためにも、次は成佐という人物について整理したい。

藤原成佐は『尊卑分脈』の記述に従うと、久安六年（一一五〇）十二月二十九日に四十四歳で出家をしており、翌七年正月二日に四十五歳で卒している⁸⁾。逆算すると、嘉承二年（一一〇七）の生まれとなる。

成佐の父は正五位下、駿河守の藤原行佐で、母は賀茂道言女である。父より四代前の邦恒から行房、行実、行佐まで代々藏人を務めており（『尊卑分脈』）、成佐自身も天養二年（一一四五）正月七日に藏人に補されている（『本朝世紀』）。また、母方の父である賀茂道言は代々天文・暦数を司る家系に当たり、道言も暦博士、陰陽頭などを務めている（『尊卑分脈』）。頼長は成佐に『周易』の手解きを受けているが、易に対する知識は母方の賀茂氏に由来すると考えられる。

頼長は康治二年（一一四三）十月十二日に、翌年の甲子革命の仗議に向けて学ぶ事を成佐に相談し、『周易』に点を加え、摺本と対校させた。そして、その後も成佐の協力を得ながら『周易』の学習を進めている。また、それ以前には『春秋左氏伝』を学ぶ際にも、頼長は成佐に摺本と対校させるなど手伝わせていたようである（康治二年七月十三日条）。頼長は自分が成佐の弟子であると記しているが（康治二年十二月十八日条）、或いは『春秋左氏伝』の学習に没頭した康治元年前後に成佐に師事したのかもしれない。『尊卑分脈』にも「宇治左府師匠云々」とあるが、数多の師友を差し置いて唯一師弟関係に触れていることは特筆すべきことである。⁹⁾ 後世において頼長との師弟関係が強く意識された傍証となりうる。

成佐に関する古い記事としては、『魚魯愚鈔』にその名を見出すことができる。すなわち、保安二年（一一二二）三月二十五日の文章生に補された十二人の中に「正六位上藤原朝臣成佐」とあり、平¹⁰⁾

信範などと同じ時に十五歳で文章生になっている。成佐はその後、文章得業生となった。¹¹⁾ 康治三年には雅楽助と見え（康治三年二月二十一日条）、その翌年には藏人に補され（天養二年正月八日条）、同年三月には式部丞と見える（天養二年三月六日条）。成佐の藏人としての働きについて、頼長の義兄藤原公能は「成佐藏人に補するの後、禁中に古風有り」と評しており（天養二年三月二十三日条）、頼長が古事復興に努めた事績とも重なる。成佐は頼長の志を少なからず反映する役割を果たしていたと思われる。久安三年二月五日に頼長は成佐を家司に補しているが、「成佐を家司に補す。須く職事に補するを先とすべし。以て故より之を尊ぶ為に、直ちに家司に補す」とあり、成佐を尊重していたことが分かる。成佐はその後、頼長の汲引によって式部権少輔となり（『台記』『本朝世紀』久安四年正月二十八日条）、新院（崇徳上皇）の昇殿を許されている（久安六年八月十九日条）。

特に、式部権少輔への推挙は頼長の成佐に対する推重ぶりがよく表れている。

〔台記、久安四年正月十六日〕

成佐申文、（式部権少輔、）付範家令奏云、成佐、其才勝傍輩、何不超上臈乎、近代、無以才能任弁官、又如此儒官、不超上臈者、誰人勸学乎、加之、微臣記名姓唯成佐之力也、臣大臣勞十三年、以臣勤王之功、枉被賞成佐者、

頼長は式部権少輔の欠員に成佐が上臈を超えて任ぜられるよう、

鳥羽法皇に推挙している。成佐を傍輩に勝る才能ある儒官とし、今の自分があるのはただ成佐の力によると説く。そして、自らの大臣としての十三年の功労に代えて成佐を賞するよう頼んだ。これに対し、法皇は「丞相の推挙、甚だ以て懇切なり」と頼長の熱意を汲み取っている（久安四年正月二十三日条）。

さらに、頼長は大外記中原師安に命じて告文「請以成佐式部権少輔之状」を大学寮の廟堂で朗読させ、焼却させたが（久安四年正月二十六日条）、この告文でも頼長は成佐の高才と師匠に対する恩を強調した。そして、頼長は法皇へ奏上した時と同趣の表現を用いながら、成佐の学才と頼長の功労によって式部権少輔に任ぜられるように「師匠尊重」を説き、文宣王（孔子）に祈願している。

こうした頼長の推挙に対して、摂政で兄の忠通は「上臆数人有りと雖も、成佐才名有り。超えて之を任ずるに何の難有らんや」と法皇に尋ね、法皇は「唯才名の高きに非ず。丞相の挙有り。之を任ずるに、誰人か間然せんや」と答え（久安四年正月二十六日条）、久安四年正月二十八日の除目で成佐は上臈十二人を超えて式部権少輔に任ぜられた（『台記』『本朝世紀』）。鳥羽法皇の言葉にもあるように、成佐の昇進は頼長の力に依るところが大きかったのである。

次に、成佐の才学について確認したい。
現存する『台記』における成佐の初出は橋本義彦氏も指摘するように、保延五年六月四日の作文会の記事である¹²。忠通が主宰した作文会に頼長等と共に参加し、「看月自忘暑」と「花木逢恩賞」の二

題について詩を献じたようで、『台記』には成佐の「花木逢恩賞」の詩の腰句「見粧如子非凡種、以邑事君勝衆林」を載せる。これが唯一現存する成佐の漢詩となる。本文に欠損があり不分明ながら、忠通はこの句を称賛したようである¹³。

また、康治二年二月十八日には、「午の時、成佐四季賦を作る。淮南より早し。御前に於いて坐を去らず之を作る。失錯無し。首尾神妙」とあり、成佐が当座で詩を作り、誤りのなかったことを記している。その他、和歌序を書いたり（天養元年九月十九日条）、頼長に言われて和歌を献じたり（天養二年三月十七日条）、崇徳院主催の作文会で頼長の漢詩を代作したりすることもあった（久安二年十一月一日条）。

こうした成佐の学才について、頼長は当代の儒者と比べて評価している。

〔台記、康治二年正月一日〕

私四方拜事、檢先例、治曆四年雖日食有此事、見御曆、猶依為疑、去年仰大内記藤令明・文章得業生成佐・友業、（无官六位、）令勸申漢家之事、令明・友業申可有之由、成佐申可止之由、案之、成佐以得理、因止之、《中略》後日友業・成佐等云、見日出間所少蝕也、通憲云、全不蝕、当世之才士只此三人耳、因記所申、

例えば、頼長は日蝕時の私の四方拜に関して、令明と成佐、藤原友業に漢家の例について勸申させた折、成佐に理があるとして四方

拝をやめた。そして、友業、成佐、藤原通憲の三人を当世の才士と評している。友業は頼長近習の学者で、通憲は信西としてよく知られる碩学である。

また、令明の死に際して、紀伝道の儒者では敦光や成佐などの他に令明に及ぶ者がなかったと評しており、成佐の才を敦光と令明に比肩させている。

〔台記、康治二年八月二十四日〕

大内記令明（余師也、）俄疾病、将死之由其子敦任告送、即遣召覚証闇梨、未来之間、遣侍為時間疾、成佐来云、已死、但未气絶、于时余召时秋欲拏楽、余聞之令罷、申刻（終、）覚証来、即遣之、帰来云、已气絶了、仍不能祈帰了、余悲之甚、命家臣停宴楽、伝聞、已刻客来、令明端衣服逢之、俄病入臥内云々、紀伝儒、敦光・成佐等外、其才无及令明者、惜哉々々、生年七十、

令明は大内記や文章博士を務め、頼長に『孝経』や『文選』を教えた師でもあった（康治二年八月二十五日条）。また、敦光は文章博士や式部大輔を務めた人物で、頼長の読書始の師であった（天養元年四月二十日条、同年十一月一日条）。頼長がいかに成佐の才学を評価していたかが分かる。

康治二年七月二十二日、頼長は孔子の影前で初めて経書講論を行ったが、その記念すべき最初の講論で『春秋左氏伝』の講師を成佐に任せている。

〔台記、康治二年七月二十二日〕

次文章得業生藤原成佐（通全経大義、）持左伝巻第一、進就坐講経、其辞義絶妙、不可得言、衆人側耳歎美、

成佐は全経の大義に通じていると頼長に評され、その辞義は絶妙で、衆人を感じさせたという。成佐はその後も講論の講師や問者、堅義の探題などを務め、頼長の経学を支える中心的な学者であった。

さらに、頼長の一男兼長が高陽院で私に『孝経』を初めて学習した時の講師を務めたり（天養二年正月二十一日条）、頼長の泰山府君祭の都状を作ったりするなど（康治元年八月五日条、康治二年十月七日条）、公私にわたって重要な役割を果たしている。

このように、成佐の傑出した才覚と頼長との親密な師弟関係は『台記』から確認することができる。こうした人物像を踏まえた上で、以下では『台記』を手掛かりに二つの成佐説話について考察したい。

四 二つの説話と『台記』

（一）『続古事談』における諫臣成佐

まず、成佐について注目すべきは、単なる学問の師ではなく、頼長の諫臣でもあったことである。成佐の諫言について見てみたい。

〔台記、康治元年（一一四二）九月九日〕

此亭修造（依女御代也、）間、渡仲範六条宅、癡場付巴豆・漆等、自漆木出汁付之、余召諸臣問曰、未知漆可否也、先令仲資試矣、

諸臣皆曰善之、秀才成佐進諫曰、志有之、損人安己之、君子不為諸、是君之所知也、疾雖癒之、惡名必遣代、豈可謂善乎、余即取漆塗之、君子曰、以諫止君過矣、忠直兩備、藤丞相過無憚改、詩曰、如切如磋、如琢如磨、其藤丞相之謂乎、

この時、頼長は腫物に漆の汁を付けることの可否が分からないので、先に仲資で試してみてもどうかと諸臣に尋ねた。皆が是認する中、唯一人成佐だけが他人を損じて自らを安んずることは君子のすることではないと頼長を諫めたのである。頼長はこれを聞いて直ちに漆を塗り、「以て君の過ちを諫止するかな、忠直両つながらに備ふ」と君たる頼長を諫めた成佐の忠義で正直なさまを称えている。また、頼長は成佐の死後に、かつて自分を諫めた言葉を思い出して記している。

〔台記、仁平三年（一一五三）九月十四日〕

故成佐諫曰、匈奴無道、不必受君命、是以、禪閭時度々雖有其議、不能果遂、昔孝文皇帝時、南越尉他自立為帝、帝召責他兄弟、以德懷之、他遂称臣、与匈奴結和親、而背約入盜、令辺備守、不發兵深入、惡煩百姓、漢家日減匈奴、唯以仁懷之、未得
以威畏之、若欲果其事、基衡遂不聽之、君將失威於東土、遣嘲於後昆、願君熟察焉、成隆朝臣俊通陳曰、基衡以本数進年貢之時、若不受之、基衡必増之、縦不及定仰之数、何無所増、亦基衡必阿媚輿輓、運不増之籌、願君勿和親矣、成佐曰、少不増之、二子、求小利不顧、君若従其言必有後悔焉、余従成隆、俊通之

諫、果如其言、成佐所言雖巧、慮不及二子、

頼長は久安四年（一一四八）に父の忠実から譲り受けた奥州の五つの荘園（高鞍、大曾祢、本良、屋代、遊佐）の年貢を増加するように翌五年藤原基衡に要求し、少なからず年貢を増やすことに成功を収めた。以前忠実が高鞍庄の年貢増額に失敗していた経緯もあり、その喜びは並々ならぬものであった。そして、当時成佐の諫言よりも藤原成隆と源俊通の言葉に従つてよかつたと得意満面になっている。

成佐は『史記』を引用して諫めている¹⁴。すなわち、南越王の尉佗が自ら尊号を立てて武帝と称したが、孝文帝すなわち漢の武帝は徒に武威を事とせず、尉佗の兄弟を召し出して高官につけて尊び、遂に尉佗は徳を以て報いる孝文帝の臣として、毎年入貢したという。成佐は奥州を「匈奴」に喩えた上で、武威ではなく仁でもって和親することを説いた。頼長が後年思い出して具に記すところに、この巧みな言辞に対する頼長の思い入れの深さが窺える。

これらのエピソードは頼長を囲む諫臣と、成佐の参謀役としての働きぶりを物語る。そして、成佐の諫諍の臣としての性格は『続古事談』の説話を考える鍵となる。

田村憲治氏は『続古事談』の末世意識と諫臣について興味深い考察をしている¹⁵。『続古事談』には、皇室に関わる数々の宝物、江家の書籍、舞楽の伝承などが失われ、撰関家や弁官、臣下が昔とは異なった姿になってしまった損亡説話が多く載せられており、こうし

た衰亡の事実を繰り返して記すことで、『続古事談』の編者が末世たる今の世を見ようとしていると指摘する。そして、『続古事談』に諫言説話やそれに類似する話が数多く所収されていることから、末世に相応しい君臣の在り方を明らかにしようとする編者の意図を読み取っている。

確かに『続古事談』には諫言に関わる説話が多い。例えば、巻一(二九)では「寛平の御位の時、菅丞相、君をいさめたてまつり給事、漢土の賢臣の諫言をたてまつるにことならず」とあり、宇多天皇の鷹狩りを諫めた菅原道真を漢朝の例に擬している。また、時代的に編者に近い例としては、巻二(六〇)に藤原長方が平清盛の福原遷都を批判した話があるが、それでも『続古事談』の成立から四十年近く前の出来事であった。この出来事も編者にとつては最早過去の事例に過ぎなかったのではなからうか。巻二(六九)では雑人が頼長の側近く通つたのを見て、令明は「世のくだれる事、あはれにて」涙を流すが、それは兄忠通の幼い頃と比べてのことであった。つまり、二、三十年の隔たりでも、時代の変遷を抱くには十分な時間であり、編者の末世意識は往昔への憧憬でもあった。とすれば、一連の諫言説話は末世の理想を示す一方で、諫臣が居た過去とそれが失われた今を語る、謂わば損亡説話の側面を持っていたとも考えられる。そして、成佐という学者が三悪道に墮ちた話も、賢臣たることが後世では力となりえないことを語る説話と解しうる。

本話は典拠が明らかでないため、説話の採録に際して『続古事談』

の編者が意図的に頼長への言及を避けたと断ずることは難しいが、結果的に頼長の影が消えたことにより、諫臣の墮三悪道譚ではなく学者の墮三悪道譚として読ませる構造となっている。また、人物への説明もないため、成佐は一人の学者として、より一般化して記されている。しかし、成佐や登宣という人物をヒントに『台記』と併せ読むことで、頼長の師であり、かつ才学に秀でた諫臣成佐の墮三悪道という末世意識の含意を理解することができる。

ところで、閻魔王が疑問を呈し、成佐が義を述べるといふ構図は、頼長が中心となつて行つていた講論や堅義の様子を髣髴とさせる。これらは経書に関する問答や議論によつて経学修練のために行われた。

講論とは講師が経文を読み上げ、通常二人の問者がそれに対して難詰し、講師が答えるというものである。また、堅義とは探題が問題を選定し、堅者が論題について義を立て、五人の問者が発した複数回の問難に堅者が答えるというものである。どちらも学識の浅深や理非を明らかにし、経書理解を深めるための儒学的論義であった。頼長は僧侶が行う論義を参考にし、仏教の作法や論理を取り入れた。実際に、僧と同じように論題を唐音で読み(久安二年八月二十一日条)、学者たちに僧の下で論義の音曲を習わせたり、僧と一緒に論義をさせたりした(久安三年七月二十四、二十六、二十七、二十九日条)。また、僧が頼長の開いた講論に参加することもあり、僧侶と学者の交流の中で、仏教の作法を取り入れながら講論を行つてい

た。

成佐も僧と共に論義を行い、その作法を身に付けていた（久安三年七月二十九日条）。また、成佐は講論で講師や問者を数多く務め、堅義では記録に残る全三回の内、天養元年（一一四四）八月二十一日と久安二年八月二十一日に探題として参加するなど、講論の中心的役割を担い、儒者たちの中でも擢んでた才能を発揮していた。にもかかわらず、閻魔王の疑難に答えられなかったことは、成佐の俗世での学才が冥途では役に立たなかっただけでなく、ある意味で頼長を中心とした学問の敗北すら意味していた。『台記』から説話を讀むことで、幽冥を隔てれば生前の知識や弁舌が全く役に立たなかったという悲劇性をより強く理解することができる。¹⁶

（二）『古今著聞集』の頼長供養と『台記』

次は、『古今著聞集』の説話を考えるためにも、『台記』における成佐の死の前後を見てみたい。

頼長が成佐を崇重する姿勢は、成佐が病気で亡くなる前後でも顕著に見られる。久安六年十一月五日に頼長は登宣を使いとして成佐を見舞い、同七日には病床の成佐を救うため安倍泰親に泰山府君を祭らせている。この時、都状に頼長の名を書くべきであったが、同月五日に亡くなった祖母藤原全子の喪に服していたため、成佐の名を書いたという。十二月十三日には三尺の薬師如来像を図絵し、薬師經十二巻を摺写し、その外題を自ら書き、東大寺得業覚敏を導師

として成佐の家で供養させている。成佐は両足が大いに腫れ、出家を望んだが、頼長は許さなかった。成佐は有忠に託け、穀物は食べられないが、薯蕷粥があれば食べることができると言ったので、頼長は直ちに薯蕷粥を煮て成佐に送っている。また、同月十六日にも薯蕷粥を成佐の家に送っている。同月十八日には師である成佐の家に自ら見舞いに行くことを父の忠実に請うたが、許されなかった。さらに、同月二十八日には成佐に頼んで抄出させていた『毛詩正義論義』の草案の草子十六帖を披見して、悲嘆に堪えている。しかし、成佐はその翌朝に出家した。頼長は『論語』子罕の「天之將喪斯文也」という言葉を借りて、「天の文を喪ぼす、嗚呼哀しきかな」と成佐の出家により文が減ぶことを悲しみ惜しんでいる。これと全く同じ言い回しは大江家の書籍が火災で焼けた時にも使われており（『宇槐記抄』仁平三年四月十五日条）、頼長にとって成佐の出家は江家の書籍の焼亡にも匹敵する損失であった。成佐は久安七年正月一日の夜半に亡くなり、「師に三飯有り」と三日間の休暇を得て師の喪に服すことを忠実に請うたが、近代は籠居しないとして、出仕すべき由を伝えられた。その後、仁平元年三月二日に登宣を使いとして成佐の喪を弔うため、その母を弔問している。

説話の後半に記される頼長の供養と有忠の夢告は現存する『台記』に見出すことができない。但し、この結末が『台記』に記される頼長の心情を少なからず突き放したものであることには注意が必要である。なぜなら、頼長の追善がどれほど功を奏したかは明らか

でないが、成佐が餓鬼道にいたという結果から、その効験は決して大きくなかったと考えられるからである。編者の橘成季は『台記』を読んでいたと推測されるが、頼長の師への思いや祈りが報われないうところに『台記』から距離を置いた編者の筆致を認めることができる。

それでは、なぜ頼長の供養が余り効果を発揮しなかったのであるうか。『続古事談』には記されない成佐の「法師がかたち」はこの疑問を読み解く示唆を与えている。法師姿は死の直前の出家を反映した姿と考えられるが、『台記』において頼長は成佐の出家を一度止めている。成佐ほどの有能な儒者を失うことが頼長にとってどれほどの損失であったかは容易に理解されるが、死に瀕した成佐の願いを斥けたことは頼長の利己的な判断と言わざるをえない。つまり、成佐が自らの後世に向けて仏事を修し、死後の幸福を祈ることを妨げたと解することができるのである。ここに成佐の墮三悪道の契機を見ることができる。

さらに、供養の効験が芳しくなかったことには頼長の心の問題が少なからず影響していたのではなからうか。頼長は参議になった兼長と師長の息子二人に遺誠を与えているが、その中で「凡そ至孝の志有らば、能く王事を勤め、以て我が恩に報いよ。後世を訪ふに至りては、望む所に非ざる者なり」と記している（『宇槐記抄』仁平三年九月十七日条）。すなわち、頼長は息子たちを戒めて、帝王のために力を尽くすことで親への恩に報い、自分の来世の安楽を祈る

必要はないと言っている。そこには天皇への忠勤によって親への孝行に代えるという頼長の現実的な思想が表れているが、一面では仏教への不信心すら垣間見える。そのような頼長が供養を行ったところでどれほどの効果が期待できたであろうか。自らの後世を弔うことを否定する態度は、師の死後に追善を行う頼長の姿と自家撞着を来している。

花園天皇は『台記』を読んだ後で、頼長の人物考証を記しているが、その中で頼長の信心に言及している。

〔花園天皇宸記、元亨四年（一二三二—四）二月十三日〕

又公春寿考事致祈禱、而遂以死去、後偏不信佛法之由記之、愚之甚不敢可言、

秦公春は頼長の隨身として寵愛を受けた人物であるが、頼長は延命の祈りも空しく公春が亡くなったことを受けて、「後に偏に佛法を信ぜざるの由」を記したという。『台記』のこの記事は伝わらないが、花園天皇が「愚の甚だしき、敢へて言ふべからず」と評した⁽¹⁷⁾ように、佛法に対する不信を記したことは頼長の人物像を考える上で看過できない。

また、『保元物語』でも神事仏事を疎かにしたことを頼長の死と結び付けており、頼長の不信心については『台記』に断片的に表れているに過ぎないが、後世、ある程度の共通認識であったと推察される。

以上のことから考えると、『古今著聞集』で語られる供養の失敗

は頼長の不信心から来たものではなかっただろうか。『台記』を見た成季は、成佐と頼長の親密な師弟関係や、仏法を信じないとまで放言する頼長の人物像を知っていたはずである。それゆえ、法師姿の成佐や頼長との師弟関係を説話の中に明示することにより、『台記』に表れている頼長の不信心を示唆したのである。頼長の不信心は、『古今著聞集』に記される成佐の仏道を軽視する態度とも通底する。すなわち、本話は仏法に対する不信を主題としているのである。

五 おわりに

成佐に関する二説話を『台記』の記述と併せて考察することで、ある程度、頼長周辺の人物を『台記』から捉え直す必要性を提示することができたのではなからうか。『続古事談』では、学者が生前の才学を発揮できず三悪道に堕ちた話から、頼長の諫臣が三悪道に堕ちた話へと解釈する可能性を示した。これは『続古事談』の編者の末世意識と通じ合うものであった。また、『古今著聞集』では、頼長の供養がそれほど効果を得なかった理由について、頼長の仏教に対する不信心という側面を明らかにした。すなわち、『台記』という新たな視点を加えることでそれぞれの編者の意図を浮き彫りにし、説話内容の奥行きを深めることができるのである。そして、説話集の特徴を明らかにし、頼長という人物がどのように理解された

のかを考える契機にもなりうるのである。

ところで、『台記』には、他書に余り記事を見出すことができない人物の言行が少なからず残されている。そして、その中には説話として語られる者も存在する。当然ながら成佐もその一人であるが、他にも菅原登宣、秦公春などを挙げることができる。彼らは身分もそれほど高くなく、頼長との緊密な結び付きにより地位を保持していたが、こういった人々の登場する説話の理解には『台記』が欠かせないものとなるであろう。¹⁹⁾

仮にこのような頼長周辺を源泉とする説話を「頼長淵源説話」とするならば、これらは『台記』の記事によって理解を深め、新たな視座で解釈を加えることができると考えられる。『続古事談』と『古今著聞集』の他にも、『古事談』や『宇治拾遺物語』、『今物語』には頼長淵源説話と見做しうる説話が収録されている。これらの中には出典が明らかでないものも少なからず存在するが、『台記』から改めて捉え直し、解釈することで説話内容を明らかにする契機となりうるだろう。

*引用した本文は、『台記』（保延二年十月〜康治二年十二月）は史料纂集、『台記』（康治三年（天養元年）以降）と『宇槐記抄』は増補史料大成、『続古事談』『保元物語』は新日本古典文学大系、『古今著聞集』は古典文学大系、『尊卑分脈』は新訂増補国史大系、『魚魯愚鈔』は史料拾遺、『論語』は新釈漢文大系、『花園天皇宸記』は史料纂集に拠り、傍線・傍点を付した。なお、引用文のへは割注を表す。

注

- (1) 以下、書名を省略する。但し、『字槐記抄』は抄本であるため別に書名を記す。
- (2) 成佐の「泰山府君都状」は『本朝文集』巻五十九にも載る。
- (3) 小島小五郎『公家文化の研究』（国書刊行会、一九八二）や橋本義彦『藤原頼長』（吉川弘文館人物叢書、二〇一〇）などには成佐への言及があるが、説話には触れていない。
- (4) 但し『古今著聞集』二七四は「御遊抄」所引。磯水絵氏は「台記」から『古今著聞集』に更に多くの説話が採られた可能性を指摘する（磯水絵「『古今著聞集』の『台記』の受容―巻第六、管絃歌舞篇第七を中心に―」『歌語りと言話』（新典社、一九九六）。
- (5) 神戸説話研究会『続古事談注解』（和泉書院、一九九四）参照。
- (6) 『台記』では他に「四天王寺別当法橋信永」とも（仁平三年五月二十一日条）。
- (7) 例えば、鎌倉本・金刀比羅本は「菅給料登宣」、京都大学附属図書館蔵本は「典厩療のりのぶ」、半井本は「菅給断盛宣」、古活字本は「菅旧料業宣」とある（武久堅『保元物語六本対観本』（和泉書院、二〇〇四）。
- (8) 成佐の出家と死去は『台記』久安六年十二月二十九日条と久安七年正月二日条、『本朝世紀』仁平元年正月二日条に記されている。
- (9) 例えば、頼長が源師頼から江家の説によって『漢書』を読み授かったことは、『今鏡』「飾太刀」や『古今著聞集』巻八（三〇六）に記されて有名である。
- (10) 本文は「十三人」とあるが、列記される名は全部で十二。誤写か。
- (11) 『台記』では康治元年九月九日以降に「秀才成佐」、「文章得業生成佐」と見える。
- (12) 注（2）橋本前掲書。
- (13) 『台記』保延五年六月四日条に「先講成佐詩之時、殿下頗」。「吟詠、其句云、見粧如子非凡種、以邑事君勝衆林、是腰句也」とあるに拠る。
- (14) 「南越王尉佗自立為武帝。然上召貴尉佗兄弟、以德報之。佗遂去帝称臣。与匈奴和親。匈奴肯約入盜。然令辺備守、不發兵深入。悪煩苦百姓」（『史記』孝文本紀）に拠る。「台記」本文の「責」は「貴」の誤りか。
- (15) 田村憲治『続古事談』『説話集の世界Ⅱ（説話の講座第五巻）』（勉誠社、一九九三）参照。
- (16) 隔生即忘の説話は「宇治拾遺物語」（六八）にも見えるが、これは笑話的である。
- (17) 「字槐記抄」仁平三年正月十九日条に「左近衛府生秦公春逝去。愁嘆の事数十丁に及ぶ。仍て私に今之を略す」とあるだけで、該当する記事は残っていない。
- (18) 「氏長者ニ至ナガラ、神事仏事疎ニシテ、聖意ニ叶ハザレバ、我伴ハザル由、大明神御託宣有ケルトゾ承ル」（『保元物語』中「左府ノ御最後付大相国御歎キノ事」と見える）。
- (19) 例えば、秦公春は『古今著聞集』巻十（三七八）、巻十五（五〇三）の他、『今物語』（一四）にも説話が載る。